

新 知 故 温

静岡県立中央図書館所蔵の貴重書紹介(7) 平成 12 年 8 月 15 日

伊豆国の地誌 (その 3)

熱海温泉図彙 (S291.2/11)

江戸の戯作者山東京山が、熱海温泉に入湯した時の見聞をもとにして書き上げた名所案内記です。熱海とその周辺の絵入り地誌と言うこともできます。

山東京山(1769 - 1858)は、やはり戯作者・絵師として著名な山東京伝(1761 - 1816)の弟で、本名を岩瀬白樹、字は鉄梅、涼仙・覺山などとも号しました。漢学や書を学び、一時は丹波篠山藩(兵庫県)青山氏に仕えた時代もありましたが、8年ほどで青山氏のもとを去り、篆刻を生業としながら、数々の作品を発表しました。

文政13年(1830)年7月8日、腕の痛みと打ち身を癒すため、この年62歳の山東京山は、子の京水を伴って江戸京橋を出立しました。天気には恵まれましたが、無理をせず、普通は小田原宿まで2日間の行程を3日かけて歩きました。ここから熱海まではおよそ7里(約28km)。京山は山道を駕籠に揺られ、熱海温泉渡辺彦左衛門の旅宿に到着しました。熱海には温泉を引いて湯場(浴室)を作り、旅人を宿泊させる客屋が27軒ありましたが、京山が訪れたときには休業中の店もあり、21軒の名前が記されています。宿泊の形態としては食事付と自炊の別があり、食事付の場合の料金は、現在のお金に換算すると、一人あたり1週間で1万5000円程度、そのほか入湯料として2000円が必要だったようです。

入浴法について京山は、「第1日目は朝夕の2度入浴。あまり熱くない方が良く、入浴の時にはまず顔、そして体に湯をかけてから湯に入る。痛むところがある人はその場所を揉み、温まったところで湯から出て体をさまし、再びざっと湯に入る。第2日から4日目にかけては食前に3度、5日目からは昼4度、夜2度の6回入浴する。7日間を一回りとし、最初の一回りで病を治し、次の一回りで体を健やかにする」と記しています。京山がこの通りの入浴をしたかはわかりませんが、彼はここに2週間滞在しました。

京山は、熱海滞在中にこの『熱海温泉図彙』を執筆しました。序文の日付が7月20日となっていますので、京山はこの書をわずか10日程度で書き上げたこととなります。

また京山は、熱海に湯治に行くというと豪奢で、遊山と思われがちであるけれども、費用も低額であるから、病める人は医者にかかる費用を省いてこの熱海温泉に入浴し、長命を楽しむのがよいであろう、と記しています。そして、熱海温泉は世間に知られているけれども、その効能を細かに紹介したものがなかったので、

「編者の老婆心」からこの書を出版することとした、と結んでいます。

【参考図書】

日本名所風俗図会 5 東山・東海の巻
(291.08/111)